



北海道公立大学法人  
**札幌医科大学**  
Sapporo Medical University

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title 論文題目	オピオイド鎮痛薬治療による非がん性慢性痛患者の生活への影響に関する研究 1. Efficacy and practicality of opioid therapy in Japanese chronic non-cancer pain patients 2. Lived experience of chronic non-cancer pain patients receiving opioid therapy in Japan: A qualitative study
Author(s) 著者	進藤, ゆかり
Degree number 学位記番号	甲第 2986 号
Degree name 学位の種別	博士 (医学)
Issue Date 学位取得年月日	2018-03-31
Original Article 原著論文	1. Efficacy and practicality of opioid therapy in Japanese chronic non-cancer pain patients 2. Lived experience of chronic non-cancer pain patients receiving opioid therapy in Japan: A qualitative study
Doc URL	
DOI	
Resource Version	Author Edition

## 学位論文の内容の要旨

報 告 番 号	甲第 2986 号	氏 名	進藤 ゆかり
<b>論文題名</b> オピオイド鎮痛薬治療をうけている慢性痛患者の生活への影響に関する研究			
1. 日本における非がん性慢性痛患者へのオピオイド治療の有効性と臨床的課題			
<b>研究目的</b> 本研究の目的は、オピオイド鎮痛薬を使用している非がん性慢性痛患者のオピオイド治療中に対する自己評価と痛みの程度が、日常生活における身体的、精神的、社会的状態、および対処行動にどのように関連しているかを明らかにすることである。			
<b>研究方法</b> 対象者：研究期間に 2 施設のペインクリニック外来を受診中で非がん性疼痛を持ち、オピオイド鎮痛薬治療中の患者であり、本人から研究参加の同意を得た。 調査期間：データ収集時期は平成 26 年 3 月～27 年 4 月であった。 調査内容：外来診察時の待ち時間を利用して、面接聞き取り質問紙調査を実施した。 質問内容は、基本属性、疼痛部位、発症年月、痛みの程度は Visual analogue scale(VAS)を用い、健康に関する QOL は Short Form36(以下 SF36)を用いた。SF36 は、各種疾患患者に加えて、一般健康人に対しても用いられる QOL 尺度で、8 つの下位尺度からなり、汎用性が極めて高く、多数の研究による標準値も報告されている。痛みの対処方略については、Coping Strategy Questionnaire(CSQ)を用いた。CSQ は、痛みに対する対処として認知と行動を区別して考えており、認知的対処方略には 6 つの下位尺度、行動的対処方略には 2 つの下位尺度があり、妥当性、信頼性が証明されている。			
<b>研究結果及び考察</b> 対象は男性 17 人、女性 17 人の合計 34 人であった。平均年齢は $60.8 \pm 15.8$ 歳だった(範囲 22-86 歳)。疼痛持続期間とオピオイド治療期間の平均はそれぞれ、 $11.3 \pm 9.6$ 年(中央値 9.1 年)、 $3.5 \pm 2.8$ 年(中央値 2.5 年)だった。便秘、眠気、めまい、下痢、吐き気といったオピオイドの副作用症状は、対象者の 32.4%、39.4%、44.1%、58.8%、63.6%に認められた。対象者は以前の非オピオイド治療よりも、現在のオピオイド治療を有意に効果があると評価していた( $P < .001$ )。 労災の有無やオピオイド療法継続年数や睡眠への支障、現在の痛みは、オピオイド治療の効果に負の相関があった( $P < .05$ )。			

オピオイド療法の効果は、CSQ の認知的対処方略の下位因子である「破滅思考 Catastrophizing」尺度と負の相関があった( $r = -0.5, P < .01$ )が、一方で SF36 の下位因子である emotional functioning role(日常役割機能(精神)得点)尺度と正の相関があった( $r = .38, P < .05$ )。モルヒネ投与量は、オピオイド療法期間、食欲、現在の痛みの程度と正の相関を示し、また、破滅思考尺度と正の相関があり( $r = .36, P < .05$ )、SF36 の下位因子全てと負の相関があった。

### 結 論

- 非がん性慢性痛患者は、オピオイド治療が以前の治療よりも有意に効果があると自己評価していた。
- オピオイド治療に対して評価が低い患者は、Catastrophizing な対処行動を示すことが多く、評価が高い患者は、emotional functioning role が高かった。
- 患者評価によるオピオイド治療効果とオピオイド投与量とは相関がなく、オピオイド投与量が増えても患者の治療評価は上がらない。
- オピオイド治療期間が長い患者ほど、有意にモルヒネ投与量が増えていた。Catastrophizing 得点はモルヒネ投与量が増加するほど、有意に増加していた。これは、破滅思考の多い患者には、オピオイド治療効果が少なく、投与量が増え、過剰投与の危険性が高いことを示唆した。

## 2. 非がん性慢性痛患者が日本でオピオイド治療を受けながら生きてきた体験：質的研究 研究目的

本研究の目的は、日本で非がん性慢性痛に対するオピオイド治療を受けている患者の生きてきた生活体験を明らかにすることである。それはまた、このような慢性的な痛みを持つ患者の生活の質を高めるための提案や支援に対する示唆を得ることができる。

### 研究方法

研究対象者は、ペインクリニックで治療を受けていた非がん性慢性痛患者 34 人だった。対象者には、慢性痛を抱えてオピオイド治療を受けながら生きていく日常の生活体験や思いについて、率直に語ってもらった。データは半構造化インタビューを用いて収集され、グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析した。

最初のインタビューは、半構造化された以下の六つの質問から成るインタビューガイドを用いて実施された。

- 1) あなたの痛みの原因として何が起こったのか？
- 2) どのような問題が起こったのか？
- 3) どのようにあなたは痛みを管理しているのか？
- 4) 最も悪いことまたは慢性的な痛みを持っているために変わったものは？
- 5) あなたにとってオピオイド薬を服用することはどのようなことなのか？
- 6) あなたが今後望むことは何ですか？

2 回目のインタビューで初回インタビュー内容について、対象者にその妥当性を確認し、対象者の話した文の意味を明らかにした。インタビューは1回平均1~2.5 hであり、インタビュー内容は対象者の同意のもと IC レコーダーに記録し、逐語録化した。

対象となるオピオイド鎮痛薬治療患者が少なく限られているため、本研究の理論的サンプリングは、データ収集の拡大のために特別な経験をもつ患者を新たに探す代わりに、その後のインタビューで新カテゴリについて再度聞き直すことによって、データを収集した。データ分析はグラウンテッド・セオリーを用い、逐語録データを比較検討しながらコード化カテゴリ化した。データ収集毎に比較検討をデータの飽和まで繰り返し行い、中心的なカテゴリやカテゴリ間の関連パターンを見出すことを最終目的とした。

データは質的データ分析に精通している主要な研究者2人によって反復的に評価者間の信頼性を確認するために検討され、コーディングの矛盾点を解決した。

### 研究結果及び考察

非がん性慢性痛に対してオピオイド治療を受けながら生きてきた体験として、8カテゴリが抽出された。患者は激痛発作を抱えた苦しみや日常生活によって影響する非情な痛み、痛みによる生活や心身への不調を含めた「消耗させる痛みを抱えた生活に対する憔悴」を体験していた。どの患者にも程度の違いはあるが、不条理な慢性痛の闘病軌跡があり、その痛みによって破滅的思考に陥りやすく、「不条理な痛みによって抱えた心の闇」を抱えていた。患者は慢性痛を抱えながら、痛みの治癒への可能性をつなぎ、疼痛障害による社会サービスの活用や状況打開を目指したセルフケアといった「状況打開を目指した試み」を行っていた。患者は医療者への信頼と依存や躊躇を抱きながら医療への拠りどころを見出し、その一方で、薬に頼りたくないといった医療依存への警鐘を感じる「医療に対するジレンマ」を抱えていた。特に、患者はオピオイド治療による挫折と落胆、副作用などの差し障りやオピオイドがもたらすものへの恐れを感じながら、一方でオピオイドが最後の砦であり、オピオイド治療に対する周囲の理解や奏功感を抱く「オピオイド治療による両面性な気持ち」を語った。患者は、社会生活の中で痛みの相互理解を阻む溝やオピオイド処方まつわる様々な障壁を体験し、「慢性痛と生きることへの社会の壁」を感じていた。しかし、痛みを抱えながらも痛みに囚われず、無心に生きることや痛くても健康であること、活動することといった自分や生活とのバランスを保ち、現在の状況に対して諦観するといった「慢性的な痛みと暮らしながら妥協していく」ことを述べていた。そして、痛みがあっても生きがいがある生活をし、周囲の支えへの感謝を感じることによって、可能な範囲での自分らしく「生きることへの再起」に向かっていた。

これらの各カテゴリ間は関連しており、オピオイド治療を受けている非がん性慢性痛患者は、彼ら独自の方法で痛みにより良く対処するために、「状況打開を目指した試み」を行いながら、「慢性的な痛みと暮らしながら妥協していく」ことによって、彼らの通常の生活を再開することへ影響を与え、「生きることへの再起」に向かっていた。一方で、「消耗させる痛みを抱えた生活に対する憔悴」や、「慢性痛と生きることへの社会の壁」、「不条理な

痛みによって心の闇を抱える」ことが、痛みに対する対処行動に悪影響をきたし、「オピオイド療法に対する両価的な気持ち」と、「医療に対するジレンマ」が、良くも悪くも彼らに影響を与えていた。

#### 結 論

- オピオイド治療を受ける非がん性慢性痛患者は、長引く不条理な痛みに憔悴し、社会的に不条理な闘病軌跡によって心の闇を抱えていた。
- オピオイド治療中の患者は、医療へのジレンマやオピオイドについて常に両価的な気持ちを抱えており、医療に対して抛りどころとしている一方で、恐れや不安で薬に依存したくない気持ちを抱えていた。加えて、痛みが再燃するという予期不安も常に抱えており、オピオイド減量に踏み切れないジレンマを持っていた。
- 状況打開を目指した試みをしながら、自分たちの痛みと折り合いをつけ、妥協していくことによって、可能な範囲で自分らしい生活を取り戻していた。

#### 総合結論

- 非がん性慢性痛患者に対するオピオイド治療は有効であるが、その効果を適切に判断するためには、emotional functioning role のような適応や認知、感情的な要因に焦点をあてることが重要である。
- 破滅思考の高い患者には、オピオイド治療効果が少なく、投与量が増えてしまい、過剰投与の危険性が高い。
- オピオイド治療導入時には、長引く不条理な痛みによって安易に新しい治療にすがりたくなる慢性痛患者の特徴を踏まえ、オピオイドについてのわかり易い説明とメリット、デメリットについて患者の理解を促す継続的なアプローチが重要である。
- オピオイド治療中は、オピオイドについて両価的な気持ちを抱えている患者の気持ちを理解し、痛みの程度が落ち着いてきたときには、使用薬剤の減量や変更について提案し、患者と相談しながら調節していくことが必要である。特に、高齢者へのオピオイド治療は、それまで問題がなかった投与量でも、加齢や体調不良をきっかけに副作用が増大したりするため、慎重なモニタリングを行い、減量や薬剤変更について常に考慮していくことが重要である。一方で、慢性痛患者は痛みが再燃するという予期不安を常に抱えており、オピオイド減量に踏み切れないジレンマを持っている。そのため、オピオイド減量後に痛みの再燃がみられた場合には、すぐに緩和対応できるような体制を整えて、安心して減量試行に取り組める体制を保持することが重要である。
- 医療従事者は、彼らが受けてきた社会的に不条理を理解し、受け止めた上で、彼らが自分たちの痛みと折り合いをつけ、可能な範囲でも自分らしい生活を取り戻すために、非がん性疼痛とともに生きる人たちのコーピング能力獲得を促すべきである。

## 論文審査の要旨及び担当者

平成 30 年 1 月 17 日提出

(平成 30 年 3 月 31 日授与)

報告番号	甲第 2986 号	氏 名	進藤 ゆかり
論文審査 担 当 者	主査 教授 山蔭 道明	副査	教授 宮本 篤
	副査 教授 山下 敏彦	委員	教授 河西 千秋

論文題名	<p>オピオイド鎮痛薬治療による非がん性慢性痛患者の生活への影響に関する研究</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. Efficacy and practicality of opioid therapy in Japanese chronic non-cancer pain patients</li><li>2. Lived experience of chronic non-cancer pain patients receiving opioid therapy in Japan: A qualitative study</li></ol>
結果の要旨	<p>本研究の結果から、本邦でも非がん性慢性痛患者に対するオピオイド治療は有効だと患者は有意に評価していた。とくに、患者の日常的な役割に心理的支障が少ないほど、患者側から見た治療評価が有意に高かった。「労働災害」患者と「破滅思考」の高い患者ほど有意に治療評価が低く、オピオイド投与量が増え、過剰投与リスクが高いことが示唆された。</p> <p>オピオイド治療を受けている非がん性慢性痛患者は、彼ら独自の方法で痛みにより良く対処するために、「状況打開を目指した試み」を行いながら、「慢性痛と暮らしながら妥協していく」ことによって、可能な形でいきがいのある生活を再開しようと「生きることへの再起」に向かっていた。一方で、「消耗させる痛みを抱えた生活に対する憔悴」や、「慢性痛といきることへの社会の壁」を体験し、「不条理な痛みによって心の闇を抱える」ことが、彼らの生活に負の影響をきたし、「オピオイド治療による両価的な気持ち」と、「医療に対するジレンマ」が、良くも悪くも彼らの生活に影響を与えていたことが明らかとなった。</p> <p>以上の新たな知見が本研究で明らかになり、今後の難治性慢性痛患者に対するオピオイド治療の適切な看護介入の方向性を導き出した。</p>